

つぎに壁上部の屋根瓦との境界部分に段が左官で造られている部分に注目する。これをハチマキ(図2)と呼ぶが、これも延焼を防ぐための工夫ではないだろうか。実測した2棟の蔵のように二重三重の段となってい

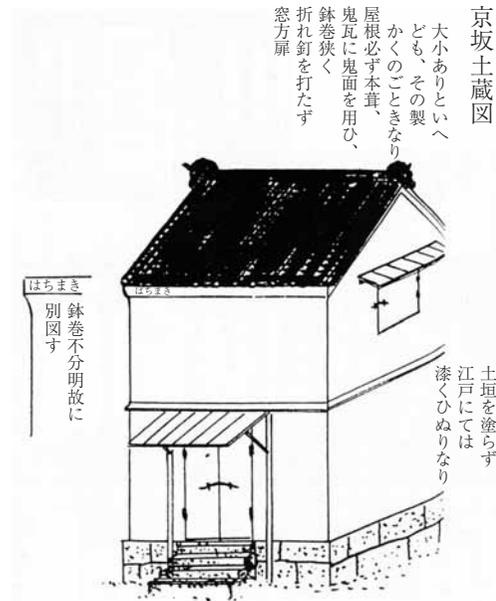


図2 京坂土蔵図 守貞漫稿卷之三(家宅)より

るものもあり、かつ一段の出(段差)もかなり大きい。上方に燃え上がる炎に対抗する形状をデザインしたように思える。加えて、ハチマキからつながるケラバ部分(切妻の屋根勾配が見える端部)をも左官で仕上げている蔵も多い。その形状も延焼を防ぐような形に見えるといっても過言ではない。

また開口部は1-2カ所と少なくかつ小さいこと、そして防火用の鉄扉が用意されているのも延焼に対する備えだと思われる。

つぎは屋根。圧倒的に本瓦葺きが多い(「蔵職人に聞く」の章を参照)。江戸期の住宅は板葺きが一般的であったようだが蔵は専ら瓦で葺かれていた。『守貞漫稿』に「京坂の土蔵は、皆必ず本葺なり」とある。

さらに、蔵には通常の伝統的な建物の軒の出がないことも特徴の一つである。雨の多い気候から壁を保護するために軒の出を

深くするのが日本の伝統的な工夫である。その結果、陰翳のある日本の空間が作りあげられてきたはずである。しかし蔵にはそれが無い。軒を出せばその部分の垂木や野地板が燃えないように土と漆喰で塗り籠めなければならないが、耐火のために軒裏を分厚く塗り籠めるのは物理的に無理がある。よって軒の出はない。けれど雨の多い日本では壁の保護も無視するわけにはいかない。そのためにもハチマキが必要だったのだろう。

その他にも、分厚い扉やその鍵・錠など火災のみならず防犯に対する工夫が多く見られる。「蔵」のギャラリー CLASSIC には逆さ札が貼られている。逆さ札は、「十二月十二日」と記され、逆さまに貼られたお札のことで、12月12日は、大泥棒の石川五右衛門が三条河原で釜茹にされて処刑された日といわれる。このお札を玄関の戸口の上に逆さまに貼ると、泥棒除けになるらしい。天井から入ろうとする泥棒に見やすいように逆さまに貼ると言われる。「蔵」のギャラリー CLASSIC では「逆さま」ではなく「裏返し」に書かれたお札が貼られている(図3、なぜ裏返しかは不明)。



図3 「蔵」のギャラリー CLASSIC の逆さ札

蔵の役目2- ステイタス・シンボル

前節では火災や盗難に対する備えの工夫に注目したが、この節ではステイタス・シンボルとしての蔵に注目してみる。

富裕だったから蔵を建てることができた。また保管すべき家具調度、衣装などを持っていたから蔵が必要だった。そして保管のための蔵を持っていること自体がステイタス・シンボルとなったと想像に難くない。火災等から大事なものを守ることと蔵自体がステイタス・シンボルであること、これは「うだつ」に似ている。「うだつ」は、延焼を防ぐ防火壁としての機能と家主の財力を誇示する意味を合わせ持つという点で似ている。

屋根は簡略葺(棧瓦葺)ではなく本瓦葺、壁は白漆喰塗り籠めで、通常の住宅よりも美しくかつ重厚でなければならない。そういう風格のある佇まいの蔵を持つこと自体がステイタスを示す。

さらにディテールに目をやると、上述した二重三重のハチマキや左官仕上げのケラバなどをはじめ、重厚な扉、鬼瓦、こて絵^{※2}などさまざまな凝った意匠を発見することができる(図4)。モノに凝るのはコストがかかるので、つまるところそれはステイタスの象徴となる。

このように蔵のデザインは、火災や盗難に対する備え(機能的デザイン)とステイタス・シンボル(のためのデザイン)の二つの考え方で説明がつく。



図4 凝った意匠の一例

住まい方の変容と蔵の新しい活用事例

近代以降、住宅の使われ方が徐々に変化した。もともと冠婚葬祭に関することは住宅で執り行われていたが、今それらは住宅ではなく外部の施設で行われている。つまりそれらは住宅の機能から失われてしまっている。したがって冠婚葬祭に使われる什器・調度・衣装等は必要ではなくなり、それらを保管することも、その場所も必要なくなった。また、かつては季節により建具を入れ替えたり、四季折々の設え品を代えていたのだが、最近ではあまり行われてはいない。その結果、蔵は無用となる。

それでも、新しい役目を任され活用されている事例もここ住吉にはある。ギャラリーやフラメンコスタジオ、喫茶店、住居などに転用されている。蔵の重厚な壁や、歴史を感じさせる佇まいという利点をうまく現在に活かした活用である。

フラメンコを踊るのに、蔵は絶好の空間らしい。床を踏み鳴らす響きを包容できる重厚で風格のある蔵の壁のなせる業なのだろう。

※1 http://www.city.tatsuno.lg.jp/bunkazai/shitei_bunkazai/kobayashikedozou.html

※2 左官が壁を塗るこてで立体的に描いた装飾画(レリーフ)のこと。

参考文献

- ・朝倉治彦編：合本自筆影印 守貞漫稿、東京堂出版、1988
- ・喜多川守貞：近世風俗史(守貞謄稿)(一)、岩波書店、1996